



第二十二回
芦屋能・狂言鑑賞の会

ルネサンス クラシックス
芦屋ルナ・ホール

2023年 11月 17日 (金)

午後 5 時開演 (終了予定 午後 7 時 40 分頃)

芦屋市業平町 8-24 TEL0797-35-0700

午後 4 時 15 分開場

前売り券 指定席 (1 階) 4,000 円 自由席 (2 階) 3,000 円 (当日券は 500 円増)

前売開始 2023 年 9 月 15 日 (金)

前売券発売所 芦屋市民センター事務所 (9:00~17:30, ㊟休み ㊟9:00~17:00)、芦屋能舞台、
芦屋市役所売店【自由席のみ】(平日 9:30~17:00)、谷崎潤一郎記念館、
ローソンチケット (Lコード 53717)

主催 能・狂言鑑賞の会 芦屋市 芦屋市教育委員会

後援 芦屋能・狂言鑑賞の会後援会

お問い合わせ ホール事業 ☎0797-35-0700 / 芦屋能舞台 ☎0797-26-6290



観世鍊之丞



観世喜正



善竹隆司



長山桂三

芦屋能・狂言鑑賞の会は、日本の演劇の源である『能・狂言』の魅力に気軽に触れて頂けるように平成元年に発足(第12回より隔年で開催)、前回の第21回からは故・父 禮三郎から受け継ぎ私が企画するようになりました。芦屋市民の皆様のお支えによりこの度 第22回を迎えさせて頂きますことを心より御礼申し上げます。

毎回東京を拠点にされている方々にも御出演を賜っており、今回は観世鍊之丞師・観世喜正師に『蝉丸』をお受け頂き、感謝いたします。

山の緑と海に囲まれた芦屋川沿いにあり、能・狂言の世界に相応しい情緒ある会場である芦屋ルナ・ホールにて、秋のひとときをどうぞお楽しみください。

能楽師 長山耕三

無料 スマホ de 解説

ご自身のスマートフォンとイヤホンで無料音声ガイドをご利用いただけます。

『スマホ de 解説』の解説者 朝原広基

「能楽と郷土を知る会」代表

能楽学会・藝能史研究会会員・能の言葉を読んでもみる会主催

三田市桑原欣勝寺の民話を基に新作狂言《くわばら》

有馬温泉を舞台とした古作の能《鼓の瀧》を三百年振りに復活上演を企画、能本作成を担当。

※「スマホ de 解説」は、スマートフォンでQRコードを読み取るだけで解説を聴くことができます。ご利用の場合は、スマートフォンとイヤホンを必ずご持参ください。公演当日のみご利用いただけます。



提供：一般財団法人 衆我財団



写真提供：『濯ぎ川』 善竹家

【協賛】(五十音順)

芦屋神社・芦屋市国際交流協会・
一般社団法人 芦屋写真協会 井上雅晴・
芦屋市谷崎潤一郎記念館・芦屋ライオンズクラブ・
大関株式会社・Gray Institute of Management・
株式会社 叶 匠壽庵・一般財団法人 衆我財団・
耕三の会(社中会員)・※他2社 社名掲載御辞退

この公演を継続させて頂けるよう、皆様の御協賛をお願いしております
何卒宜しくお願いいたします

第二十二回

芦屋能・狂言鑑賞の会

令和五年十一月十七日（金）午後五時開演

番組

一調 **花月** Kagetsu

謡 **長山桂三**

大鼓 **山本寿弥**

狂言

濯ぎ川

Susugigawa
作 飯沢 匡
演出 武智鉄二

夫 **善竹隆平**

妻 **善竹忠亮**

姑 **善竹隆司**

後見 **上吉川徹**

芦屋市長

挨拶

高島峻輔

逆髪

親世喜正

蟬丸

親世鏡之丞

能

蟬丸

Seminaru

清貫

福玉知登

替之型

輿舁

喜多雅人

琵琶之会釈

輿舁

廣谷和夫

博雅三位

善竹隆司

中森健之介

後見

親世淳夫

鶴澤 光

地謡

金子仁智翔 林本 大

上田顕崇 小島英明

笠田祐樹 長山耕三

上野雄介 武田宗典

（終演七時四十分予定）

■一調 花月 かげつ

幼い我が子が行方知れずになったことで、出家して諸国を巡る父。京都清水寺で出会った、小歌や弓矢の芸で人気を集め、寺の縁起を語る少年「花月」こそが我が子であった。芸尽くしと一体となった親子再会を描く能の佳作です。今回は父との再会にあたって、七歳で天狗に攫われてから今までに廻ってきた日本全国の山々の名を、花月が芸収めの芸として謡い上げる場面上演します。「一調」という、謡と大鼓が一对一で演奏する形式で、謡の内容は勿論、節や緩急の面白さ、通常とは異なる鼓の手など、互いに技巧を尽くしたものとなります。東京の中堅シテ方・長山桂三師の力強い謡をお楽しみ下さい。

■狂言 濯ぎ川 すすぎがわ

毎日、嫁と姑に少しの暇も与えられずに使われる婿養子の男。今日も言いつけ通り川で洗濯をしていると、それが終わらぬ内に、次々に用事を言いつけられる。あまりの多さに困り果て、男はしなくてはならない用事を紙に書き記し、書いてないことはしなくても良いと約束を取り付けて、ささやかな反抗を試みるが――。

昭和二十八年、フランスの古典喜劇を元に飯沢匡が台本執筆、武智鉄二の演出で初演された新作狂言で、現在に至るまで広く上演されている作品です。

古典にもある女性像と新作らしい工夫の両立した作品で、狂言の夫婦や家族の姿を、関西を本拠とする大蔵流善竹家が描き出します。

■能 蟬丸 せみまる

延喜帝（醍醐天皇）の第四の御子・蟬丸は生まれつき目が見えない。あるとき廷臣の清貫（ワキ）は、蟬丸を都と近江の境の逢坂山に捨てよ、という勅命の下、蟬丸を逢坂山に連れ出す。嘆く清貫に、蟬丸は後世を思う帝の叡慮だと諭す。清貫はその場で蟬丸の髪を剃って出家させ、蓑・笠・杖を渡して別れる。蟬丸は琵琶を胸に抱き、涙のうちに伏しまるる。

蟬丸の様子を見にきた博雅の三位（アイ）は、あまりに痛々しいことから、雨露をしのげるよう藁屋をしつらえる。

一方、延喜帝の第三の御子・逆髪は、皇女として生まれながらも逆さまに生い立つ髪を持つたがため、物狂いとなり辺地をさまよっていた。都を出て逢坂山に着いた逆髪は、藁屋より漏れ聞こえる琵琶の音を耳に止め、弟の蟬丸がいるのに気づき、声をかける。二人は互いに手と手を取り、境遇を語り合う。しかし、やがて立ち去る姉の後ろ姿を、蟬丸は見えぬ目で見送るのだった。

『百人一首』で知られる「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬもあふ坂の関」の蟬丸と、その姉・逆髪の物語です。「逢ふ」という名を持つ逢坂山で姉弟は再会し、そして別れます。「逆髪」という名前も、元々は逢坂の「坂の神」の意味ではないかと言われています。

仏教の哲理「会者定離（会う者は離れる定め）」を背景に細かく作り込まれた能で、一つ一つの場面が現代人の心にも深く迫ります。ハンデイを背負う二人の貴い姉弟の素直な心が、切なさ・やるせなさと共に、愛おしさをも感じさせる作品となっています。東京を中心に幅広く活躍されている観世鏡之丞家の九世観世鏡之丞師と、矢来観世家の観世喜正師をお招きし、蟬丸と逆髪を演じていただきます。鏡之丞師の力強さ・繊細さ、喜正師の華やかさの共演をお楽しみください。

当日、ご自身のスマートフォンとイヤホンで解説音声を聞くことができます。サービスを用意しております。私・朝原がご案内させていただきますので、初心者の方はぜひご利用くださいませ。

（朝原広基 能楽研究者）